

自選

五十首

川野里子



かわの・さとこ 一九五九年大分県生まれ。一九八四年「かりん」入会とともに歌を詠み始める。山形県、米国カリフォルニア州などを移り住み、現在千葉市在住。第三歌集「太陽の壺」により第十三回河野愛子賞受賞。評論集に「未知の言葉であるために」。

あめんぼの足つんつんと蹴る光ふるさと捨てたかちちはは捨てたか

ふるさとは海峡のかなたさやさやと吾が想はねば消えてゆくべし

関門海峡に夕べ桜はふぶくとふ父母さへはるかにかすませながら

春の風ゆるみほとりと地蔵町小児科医院に外灯ともる

遊ぶ子の群かけぬけてわれに来るこの偶然のやうな一人を抱けり

月山のふかきぬばたま夜をこめて人貌の胡桃音たてて飛ぶ

鬼くるみ月山の夜を太り来てことりと置けばよき顔をせり

おもむろにまぼろしをはらふ融雪の蔵王よさみしき五月の王よ

ものおもふひとひらの湖をたたへたる蔵王は千年なにもせぬなり

混沌のさきぶれならむピアニシモ目覚めゆくひとがわが名呼ぶとき

「五月の王」

白蓮や阿佐緒の直情蔑せしに時経て咲く瘧のごときは

斑鳩きてぼぼうと鳴けば幾時代過ぎたるならむ頬つゝ糸をとく

飛行機は夏空へ気化を終へむとし吾は歩むなり自転車を押して

越境し越境し心光りたる七星天道虫草の穂を翔つ

わたくしは太古手ぶらで生きてゐたはなみづき力あふれて咲きぬ

はなみづき恋のつづきの家族にて咲き盛る白が痛くてならぬ

夫がもつ柔らかいからだ堅いからだある日波うちわれをとりまく

清潔な包帯空に翻り届かぬところで膿む悲しみは

東京湾にフランケンシュタイン泣く声はをんをんと走り子は耳聴し

人間は柔らかいか堅いかと子が問うてゐる麵麴こねながら（カリフォルニアにて3首）

沖をゆく青鯨よりもなほ遠く日本はありて常にしうごく

見よと言ひて弾劾のこる胸ひらくアツシエムするどく我を見てゐき

哀しみと愛しみはひとつ遠く夜の古木ま白き桜花を噴きぬ

かく生きしわれがかく生きむわれに合図するいつせいに青葉うらがへるとき

かしこまり電車待つ父母点景にはかに肥えし東京が見ゆ

高く高く偏西風帯笑ふとき障害物競走してをり吾子と

氣狂ひし夫はだしにて追ふ夢に我が摺まへし一束の麦

ウェブのなか夫にひらけし余暇はあり静かに湿る千人の夫

さらさらとさらさらと雨は降りてをりからだの内部に外部にやがて暗部に

樋口一葉またの名を夏まつすぐに草矢飛ぶごとく金借りにゆく

「青鯨の目」

「太陽の聲」

五十首を選びながら、あらためて出発

の頃のことを思っていた。私はその頃から現在まで素晴らしいライバルに恵まれてきた。私の生年の昭和三十四（一九五

九）年前後には大辻隆弘、加藤治郎、坂

井修一、谷岡亜紀、水原紫苑、米川千嘉

子といった畏友が犇めく。まるで短歌と

いう御輿を担いで練り歩く夏祭りのよう

だ。頼もしく、激しく、心榮しく、そして決して甘くない高鳴り。わっしょいわ

っしょいという気分がどこかにずっと踊

っていたような気がする。

ぼくたちは勝手に育った。制服にセ

メントの粉すりつけながら

加藤治郎「サニー・サイド・アップ」

サバンの象のうんこよ聞いてくれだ

るいせつないこわいさみしい

穂村弘「シンジケート」

時代の先端の気分を摺み取る加藤や穂

まことしづかな浜昼顔とし吾は咲き海を見てをり百年がほど
わたくしの暗がりて夫がぬれてゆく七夕飾りの匂ひさやさや
葱のなかにこころのやうに濡れてゐる空洞はあり　そこに棲む春
草千里踏みしめて牛は立ち上がりわたくしはなんと重たい夢か
しくしくにしくしくに万里けぶらふと長城は延びて呑みし人心
夜の校庭しみじみと獺はあらはれて黒き桜を食ひはじめたり
合歓ゆらし菩提樹ゆらし奴の国の子供用甕棺ぬぎて魂来よ
陶片は古代ベルシャの青保ち旅の途中なり博物館に
霧島に父母ふかく笑みふかく老い恋のままにてふとしも逝かむ
どこか遠くで象が鳴きたり象も吾もひとつづつ己が柩を背負ふ
家族の家いままぼろしにかへりゆく母が背骨の透きとほる家
遠く待つ母は螢袋となりて夜な夜な灯りもう母を辞む
一生の愛一生こよなき時かけて小さく母を削りしならずや
鍵穴に吸はるるやうに潮ひかり母が船消ゆ速吸の瀬戸
独り家に独り餅つく母はゐてわつしよいわつしよいこの世が白し
電気鉛筆削りじいと震へぬ夫のみに語りしかなしみ夫死ねば消ゆ
名を呼ばれ息子が立ちぬその名もていつか死ぬのか弥生のひかり
十三歳のパレスチナの少年射殺されぬ十三歳は眠くてならぬ歳なり
誰の愛もどこかがちぎれてゐるかたち烏瓜の花ちぎられて咲く
若き父母出逢はむとする宇宙ありて私の宇宙は赤面をせり

村のメッセージを受け取りながら、自分
はどう応えるべきかを考えた。第一歌集
の『五月の王』で「あめんぼの足つんつ
んと蹴る光ふるさと捨てたかちちは捨
てたか」と思わず詠んでしまったとき、
思わず洩れたこの本音に付き合う他はな
いと思つた。ぼんやりと自分の行くべき
道のようなものが見えた気がした。

加藤は「へばくたちは勝手に育つたさ」と来歴を表明し、穂村は「サバンナの象のうんこ」ほどトリビアルな偶然に自らを賭ける。彼らは過去から現在へ流れてきた時間や歴史を切断し、瞬間の輝きに交える道をはつきりと選んでいた。それなら私は、切り株のように切断された時間や歴史を継ぎ、さらに積極的に創造してゆくことはできないか、と思つた。

思ひは深い、しかし作品は訓練の足りない大橋のようにどこへゆくのか全くわからない。父を亡くした後つくづくと見ることになつた母の存在感に激しく選しあつた。最近では、偶然に再び向き合うことになつたアメリカや隠れキリシタンの里である故郷との出会いがある。明日出逢うものがわからぬ夏祭りの渦中で今なお採まれている気分だ。